



## 追悼 遠山元信 会員

2020年7月14日 会員・遠山元信氏が逝ってしまった。  
4月半ばから急に体調が悪くなり、自宅療養をしていたとの事。1月の新年会には元気に出席していたのに残念でなりません。

AGC にとっては設立間もない頃から参加し、数々のユニークな企画で皆を引っ張っていただいた事や、分水嶺踏査では、率先して藪漕ぎルートを掻き分け、単に登るだけでなく周囲のさまざまな情報を得ながら、地理クラブらしい山行の見本を示していただいた事など、数多な活動の道筋を遺してくれました。

この AGC レポートにも色々な角度で、興味深い記事を寄せていただき、活動の厚みを数倍にも増してくれました。

また、私たちの知らないところでも、彼らしい活動をしていたことを新たに知りました。

ここに謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。



寄稿

### 三春を愛した上尾の人

#### 畏友 遠山元信君の旅立ち

菅野 吉雄

最初に知り合ったのは、  
さいたま市立大原中学校の入学式。  
遠山君は、上尾からの越境入学。  
私は、常葉町立常葉小学校を卒業し  
親元を離れて単身さいたま市の学校に  
越境入学。12歳の時。  
それから、67歳まで。  
遠山君は、7月14日、旅立った。  
ここ数年、三春を頻繁に訪問し、  
三春についていろいろ語ってくれた。  
.....

遠山君の奥さんが書いた、会葬のはがきに、  
感動しました。  
添付します。

戒名は  
桜峰元学信士  
奥さんが戒名の意味を語ってくれた。  
主人は、桜と山が好きだった。  
そして学ぶことが好きだった。

ご冥福をお祈り致します。

令和2年8月8日

菅野 吉雄  
(三春・舞鶴会事務局局長)

寄稿

### 追悼・遠山元信様

三春昭進堂代表 高橋 龍一

遠山元信様のご霊前に、三春昭進堂スタッフを代表して、謹んでお悔やみ申し上げます。

私は、三春城下新町にて、おたりまんじゅう本舗三春昭進堂を営む、高橋龍一と申します。 遠山様には、三春へ来られる度に、散歩の途中や、奥様が好きなおたりまんじゅうをお土産にとお買い求めに、ご来店をいただきました。

その度、様々な話をして私たちスタッフを楽しませてくれました。最後にお会いしたのが、春の花見の頃で、当店の西にある三春藩主祈願所真照寺の参道階段の草むしりをしていました。

「検査で病気が見つかったちゃってさあ～」と言いながらも、いつも変わらないあの笑顔で小1時間ほど長話をさせていただきました。その時は、以前、「遠山の金さん」こと江戸町奉行・遠山金四郎景元を彷彿させるその立ち振る舞いから、「もしかして、遠山さんは「遠山の金さん」末裔では？」との質問したことがあり、私からその問いへの答えとして、「うちの遠山はね、「遠山の金さん」とは違う富山の家系なんだよ～」と詳細をご説明いただき、先の葬儀があった遠山家の事に詳しい御親戚の話がされていた姿がまだ忘れられません。

遠山様に初めてお会いした日の事を覚えています。

「滝桜は、日本三大桜だけど日本の巨樹では順位は下なんだよ～俺の住む埼玉にはかなりの巨樹があってさあ～、今度その番付表を持ってくるよ！」と三春滞在中の散歩の途中で来店し、店内にある滝桜の写真を見て、江戸前のベランメ～調で軽快に話して帰られたのが最初だったと記憶しています。

ある時、帰り際に三春舞鶴会の会報「舞鶴通信」に目を止め、編集事務局の名に「菅野だよ～菅野だよなあ！」と興奮気味に大きな声を上げられ、私どもが訊ねるまでもなく、「この菅野はねえ～」と菅野さんとのご縁を話してくれました。

中学生の時に、田村郡常葉町から自分の学校に転校してきたことや、妙に気が合い仲良くしていた事、そして、高校入学を前に常葉に帰ってしまい、「そのうち常葉に会いに行く！」と書いて、後日、一人で常葉まで遙々会いに行ったこと。

その時の印象で「常葉という町は上尾と比べて山の中だと思ったことや、駅からやたらと遠い家だなあ～」等々、面白おかしくエピソードや、と校長時代や教育委員会、そして公民館長歴任等々を語られ、「しかし、菅野は、本当に優秀なやつだよ～」と締めくくっていました。

また、三春舞鶴会会長の織方さんのお名前を見つけては「日本山岳会」でお世話になっている方なんだよ～」と話され、「他にも見知った名前がある～」と豪快な笑いと共に「もらっていくよ」と、舞鶴通信を握り帰られました。

遠山様をご存じの方はご承知でしょうが、とにかく行動力・バイタリティーのある方で、すぐに菅野さんに連絡をとり「三春の饅頭屋・三春昭進堂で菅野の名前を見つけたよ!!」・・・

しばらくして、ご来店の際には「菅野に頼まれて、今度

舞鶴通信に寄稿するんだよ、三春出身じゃないけどなあ～ ハハハ！」

後に発行された舞鶴通信には素敵な文章が記載されていました。

三春へは時折お見えになり、滞在中、コンパス片手に「座標点を見つける！」と、精力的に歩き「三春はトレッキングやウォーキングに最適な町だね！旅雑誌に今度投稿するよ～」

私にも「中高年世代、特に団塊の世代の方々にはトレッキングが流行ってんだから、それを三春町の売りにすればいいよ～」等々、三春に棲む私たちでは、気が付かない発想を持つ方でした。

また、秩父三峯神社に保管されている古文書、全国の大名から庶民までの参詣・奉納記録や、諸国からの和紙の奉納記録等々を丹念に調べ上げていました。三春散策中もでも、その三峯神社の「御札」が、三春観光物産館「蔵」になっている旧桐屋商店（橋本捨五郎生家）の蔵扉内側に貼ってあったと、驚きをお話していました。

菅野様から示していただいた遠山さんの奥様からのご会葬御礼に「新しい場所でも自分らしく ずっと笑顔で・・・」とありますとおり、遠山様とのお話は、その知識豊富な博学にはいつも驚かされていました。

トレッキングの話、町おこしの話、遠山家・御親戚の話、菩提寺の話・・・

理論整然としたお話と、豪快な笑いを忘れる事は出来ません。

遠山様には、たくさんの笑顔と情報をいただきました。心より感謝を申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。本当に、ありがとうございました。

Subject: {三春舞鶴会:1156}  
三春昭進堂代表 高橋龍一

三春・舞鶴会はふるさと三春町の応援団として首都圏在住の三春町出身の方々や三春町に縁のあるの方々により平成21年2月に設立された会です。当初は町の出身者が大部分でしたが、今では居住地も出身地も広がっています。三春町は五万石の城下町で、お城の愛称が「舞鶴城」だったのでこの名称になりました。

遠山さんは会員ではなかったのですが、三春町のラジウム温泉が癌に効くと言って、三春を頻りに訪れており、町で出会う人々と気安く知り合っただけで三春近郊の探訪、探索に熱心で、会員よりも三春を愛する人ということでした。観光地としての三春町の長所や短所を鋭く指摘したりしてくださったので、会員扱いでした。

三春舞鶴会・会長 織方郁映（日本山岳会・科学委員会）

**寄稿**

**遠山元信会員の逝去を悼む**

資料映像委員会・緑爽会  
埼玉支部 小原 茂延

本年7月に逝去された遠山元信氏の訃報は7月15日の夜に京都からの新幹線車中で、所属する資料映像委員会の担当理事である清水義浩氏からの電話で知りました。清水理事は三角点マニアで、以前、遠山さんと地図関係の集まりで一緒になったことがあったという話が出たことがあり、私と共通の知人と覚えていて連絡して

くれたようです。

帰宅してPCを開くと、元埼玉支部の梅本知栄子女史（アンナプルナⅢ峰遠征隊の隊員・カメラマン）からも、「悲しい知らせを・・・」と遠山さんが7/14に亡くなったとの訃報が入っていました。彼女は遠山さんの指導で三角点探訪に頑張っていました。

埼玉支部には同好会に「陸地測量部」があり、遠山さんは副部長でしたが実質的に企画や読図山行、時に講演会なども仕切っていました。初めて例会で会った時から意気投合して、山のこと、地理のこと、登山史など話が尽きないほどでした。それからまだ6年という短い付き合いでしたが、例会、読図山行、講習及び講演会などを通じた内容の濃密さは今迄の山仲間とは比較にならないものでした。会報も「陸測部報」として支部報にひけを取らないほどであり、当時支部長の松本敏夫氏他、多彩な書き手が居て感心したものです。

遠山さんは登山史にも明るく、山岳会黎明期の大先達についても話題となったことも多く、その見識も確かなものでした。私が埼玉県旧鳩ヶ谷市にある観音院で見た小谷三志という富士講中興の祖(富士山が女人禁制だった江戸時代に高山たつ女を伴ったことでも知られる)の墓について話をすると、たしか鶴殿正雄の遠縁にあたる人であると教えられました。調べてみると鶴殿正雄は日本山岳会が探検登山を盛んに行っていた頃、信州小県郡長瀬村にあって日本人登山家として前穂高岳の初登頂、次いで前穂高岳～北穂高岳～槍ヶ岳初縦走、さらに天狗のCOL～奥穂高岳往復、同COLから西穂高岳に初縦走を成し遂げ、小島烏水ら発起人達を唸らせた人物ながら、あまり知られていないのは残念なことです。(現在「会報」に投稿すべく小文としてまとめている)その頃、私は新ハイキング誌に時々随想めいたものを投稿していたので、遠山さんが鶴殿正雄の生涯を書いた「孤高の道しるべ」(上條武著)の抜粋コピーを送って来て、同誌に書いて欲しい旨のメールを戴き、2017年12月号(新

ハイ誌の市販最終号)に発表したことがありました。

遠山さんは、三角点の本を出していて、「日高市の三角点」「埼玉県の三角点」が国会図書館にあるとのこと。絶版で私は見ていないのですが、若い頃から三角点に関する調査研究に熱心で、一等三角点研究会発足についての話も、お互いが今西錦司に始まり坂井初代会長、大槻雅弘現会長、上西勝也氏や飯島某氏のこと、新ハイキングクラブの全国一等三角点探索などについてお互いの情報を交換したりの会話を楽しんだものです。今年の4月中旬に当方から遠山さんに電話をして元気に会話が弾んだことを思い出すだけに、その後体調が悪化して世界されたということが信じられませんでした。合掌



埼玉支部例会にて

## 追悼・AGC会員より

### 遠山さんを思う

山岳地理クラブ代表 北野 忠彦

遠山元信さんに最初にお会いしたのがいつだったかは記憶にないが、まず大きく印象に残ったのは、04年に始まったJAC100周年記念の大分水嶺踏査でAGCが分担した甲子峠から大川峠の区間の、大川峠から上海峠先までの猛藪の尾根を数度にわたった踏査で突破したことであった。またそれとともに、携帯電話が通話不能と思われるこの山地での連絡手段としてアマチュア無線の活用を提案し、AGC内にアマチュア無線免許取得者が増えるきっかけを作ったことがあげられる。

大分水嶺の後では、読図山行を提案し、都区内、平地

### 遠山元信さんを偲んで

平野 彰

遠山さんが7月14日に亡くなったとの知らせを山岳地理クラブ(以下AGC)のメールで知った。4月に個人的な用件で電話をしたときは、とても元気そうだったのでこの訃報は信じがたい思いだった。しかしこれが遠山さんとの最後の会話となってしまった。

遠山さんが発足間もないAGCの会員になったことは、

部、奥武蔵を中心としたハイキングコースなど何度か実行に移された。都区内では几号水準点(これは全く知らなかった)の探索も行われ、非常に印象深かった。

その後、国土地理院の地形図の修正問題に関わり、高尾山周辺での地理院とのGPS精度確認研修を経て、JAC内に作られた国土地理院WGの作業で登山道修正のための多くのGPSデータを地理院に提供したことも記憶に残る。

月1回のAGC例会のあとの二次会では、あの大きな体でアルコールは全くだめなのに、時間の許す限り、駄乗りかつ喰うで時を過ごしたことが懐かしく思い出される。

陸軍参謀本部以外の農商務省などが設置した三角点や水準点などの調査報告、地形図、無線、GPSなどにも造詣が深く、AGCにとって相当のレベルアップになると感じた。入会後の活動は、まず山歩きに不可欠で当クラブの活動方針の一つでもある、地図読みが定期的な行事となり、三浦半島や秩父の山などで、現地の地形と地図とを照合し、読図の訓練が行われた。その間GPSの特性や性能などもAGCレポートに投稿され、特に日本山岳会100周年記念行事である中央分水嶺踏査においては目

覚ましい活躍をされた。特に分水嶺踏査に関連し当クラブ会員の無線従事者は大幅に増え、山行の度に無線機を携行し、いざという時に慌てないためにと、その操作の指導、訓練を行った。

分水嶺の当クラブの担当区域は、猛烈な藪に覆われたルートである。

最大難所でもある大川峠は、そこまでの道は崩落や落石の多い箇所であり、遠山さんご夫妻が手始めに調査を開始した。報告書によると、奥様が落石を除去、さらに落石の危険を感じながら、大川峠までたどり着いたが、栃木県側は完全に通行不能であった。この調査の結果この峠の広場が今後の活動のBCとなった。

又我々にとってこの地域の情報は全くの未知の世界で、その情報を集められればとの思いで、遠山さんの車で、私と二人、群馬県前橋市にある関東森林局を訪ねた。事前に林野庁からの連絡もあり、係官からカラーコピーを頂いた。これがルートや山名の確認に大いに役立ったことは言うまでもない。印象的な踏査記録としては、大川峠から上海岳経由して 1,360mのピークを目指したことである。3名での踏査隊は上海岳までは難なく通過したがその先は猛烈な笹藪と雑木が絡み合い、トップの遠

山さん共々悪戦苦闘、2時間過ぎても 200mしか進めず、更に遠雷が鳴りだし、雷の多発地帯であることから、危険を感じ引き返すことになった。

鎌房山の踏査でも、ルート上の尾根は藪の連続、どうしても北側の藪の薄いところへとルートを外しがちだが無線での誘導は大いに助かった。この分水嶺踏査期間だけでも那須野ヶ原博物館学芸員、南会津町の名士や古老、大学教授などの方々とも接触し情報取集に奔走され、その行動力には敬意を表したい。その後も地域の研究や山岳遭難の分析等々の活躍をされ、その一部はAGCレポートにも投稿されている。

12~13年ほど前、近藤さんを中心として日本山岳会所蔵の参謀本部時代の地図を整理冊子に纏めたものが、国土地理院の目に止まり、それがきっかけとなって、登山道の情報交換に協力要請があり、手始めに地理院の係官数名とAGC会員と合同で、高尾山でGPSの性能テストを行った。この時の各自のGPSの軌跡を整理したのが遠山さんで、この後の情報交換に大いに活躍された。このように亡くなる直前まで研究熱心で、活動的な遠山さんを失ったことは、我々の山岳会にとって大きな痛手である。 合掌

## さよなら ウボノトム

近藤 善則

告別式での笑顔の遺影を見たとき、本当に逝ってしまったのか・・・と信じられない思いが頭の中を駆け巡っていた。数年前、「大腸ガンが見つかったよ。」と電話越しの明るい声が今日のこの場面につながっていたことに、何故もっと色々なことを引き出せなかったんだ！ という罵声とも嘆きともつかない悔しい思いが同時に渦巻いていた。



遠山さんは、2001年の山岳地理クラブ設立間もない頃、地図・測量関連の歴史などのテーマを熱く語り、やがて中央分水嶺踏査では担当区域の地元で密着した調査を率先して行いながら、地理クラブらしい具体的な活動の見本を示してくれた。その博学と物怖じしない行動力に魅了されて参加した会員も少なくない。分水嶺踏査が完了したのち会の活動にしばらく空ろな時期があった。今後どういうことをテーマに活動していこうかと話し合っていた頃、彼からの提案で持ち上がったのが、会員の“読図技術の向上”と“情報の共有化”であった。

早速「読図研修」と題し全18回の講座カリキュラム案が示された。地図の読み方に始まり地形方向距離判断、

猛藪のブラックアウト・吹雪の中のホワイトアウト体験など、入門-中級-上級の各テーマで実施してみようという計画である。また“情報の共有化”については会員名簿(パーソナルデータ)の充実と会報(AGCレポート)の発行という形で現在に引き継がれている。

AGCレポートには彼の多分野にわたる知識や体験を基にした考察がたびたび寄せられ、会の情報や山行記録だけに留まることのない貴重な情報源ともなっているのではないだろうか。

ある号では、「この記事は実名を出すとまずいので別名にしてくれ」という要求があった。すでに会員には配信済みであり「別に問題のある内容じゃないので、このままでいいのでは」と返した。「M・T」でも“金四郎”でもいいから別の名前を・・・というので、ひねり出したのがオトカム方式である。

辻まことの別の名「オトカム」、makotoを逆に読むように、motonobuを逆にした名前である。

「ウボノトムでどうだ?」「・・・・・・」ということウボノトムに訂正した経緯がある。特に名前の意味を聞かれなかったのが、理解していたのか?していないのか?今となってはわからないが、おそらく彼の事だからもちろん理解した上で納得したのだらうと思う。そして私の中ではウボノトムとして生きつづけているのである。

さよなら ウボノトム。そっちでも図々しく自分の世界を築いてください・・・ イロニソイ

## さよなら遠山さん「お世話になりました」

高橋 素子

地理クラブの会員になり初めて遠山さんにお会いした時には、貫禄があり、先輩だし、体も大きく、声も大

きく、なんだかとても近寄りた存在でした。しかし、ある時私のほうが年上だと判明し「なんだあ〜遠山後輩か!」冗談交じりのこの会話から徐々に親しく話せるようになってきました。この件以来私のことを先輩と呼んでくれるようになり、徐々に冗談も言えるよう

になりました。例会後の会食にもお酒を飲めない遠山さんでしたが、ウーロン茶で最後まで付き合ってくださいました。知識が豊富な遠山さんの話を聞いていると、私自身も物知りになった気分させてもらった一時でした。山登りは大好きな私でしたが、地理クラブに入れてもらい基礎の基礎である地図読みが全然できずに困っていました。そんな時地理クラブの地図読み山行での遠山さんの一言「地図を拡大して 細かい所まで読む」この助言をいただき私の地図読みもまだまだですが一歩前進したように感じています。ありがとうございます。

だいぶ前の話ですが、国土地理院と JAC との「高尾山 GPS 合同調査」に参加しました。登山道にかかる変化情報の収集に、皆が GPS を装着し同時観測を行い取得データの解析処理をして、登山道の経路について地図上の位置との比較を行う調査でした。地理クラブのメンバー 7 名は、通常の GPS を利用して三名がザックの上蓋、二名がザックの左ベルトの上、一名が帽子のツバの上にヘッドランプのランプの部分に GPS を水平に置いた姿での参加でしたが、遠山さんはストックを逆さにして先端に GPS を装着して頭上高く掲げて試行していました。子供が悪戯をしているように試行錯誤し無邪気にとても楽しそうにしている遠山さんを今でも思い出します。合同調査を終わっての報告書にも「GPS の電波の受信の最良ポイントは頭上である」と遠山さんは報告をしています。

こんなに早く私たち仲間の前から忽然と消えてしまうなんて思ってもいませんでした。まえに病状を伺った時には、先生もビックリするほど回復していると話されていたので安心していましたが、とても残念です。私たちに沢山の宿題を残して永眠されてしまいました。これからも地理クラブを見守って下さいね。山へ行き、地図を見ながら遠山さんから教わったことを思い出し、一歩も二歩も前進できるように頑張っていきたいと思います。

さようなら遠山さん、ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



高尾山での合同調査メンバー (2009/6/9)

## 遠山元信さんを偲んで

今井 秀正

山岳地理クラブでお目にかかって以来、16、7 年になりました。とにかく山にかかわること以外も多くの知識を学んでいて、俗にいう博識そのものであったと思います。地学、歴史、古道、専門の電気工学、無線、GPS 等々。アマチュア無線については、免許の取得を勧められ、取得後は通信の方法や全国各地のレピーター（中継局）のリストなどを提供していただきました。彼は仕事の都合上、上尾の自宅にいる必要があったことから、私が外出した折にはその地域と上尾で利用できるレピーター

を打ち合わせ、時間を決めての通信は、かなりの回数行いました。遠くは中央アルプス、南アルプス、富士山、奥多摩、箱根、日光男体山、巻機山、福島県内の中央分水嶺などが思い出されます。アマチュア無線は緊急時に利用できることを目的に、どこから通信できるかを探り、通信できた時の満足感を楽しむものだと思っています。最近は携帯電話など、必ず“通信”できる方法が確立され、休止しているレピーターも増えているようでもあり、マニアックな趣味化してしまったように感じますが、彼は、楽しかった思い出を沢山残してくれました。冥福をお祈り申し上げます。合掌。

## 遠山元信さんを偲ぶ

私の JAC 活動の幅を広げてくれた人

大西 攻

JAC に入会した 2003 年の新入会者の説明会に山遊会として遠山さんが出席していた。その後、懇親会で私のところに来て自分は酒が飲めないが、と云いながら酒を勧めてくれて雑談を交わした。会話をしていると山に関する情報と知識の幅広さにびっくりした。自分は登山歴が長いだけに思えた。その場で山遊会の入会を勧められたので遠山さんがいるならと入会をきめた。

当時の私は、山に関する知識なら何でも興味を持っていたので、山岳地理クラブの入会も遠山さんが勧められた。山遊会で遠山さんの読図山行が行われて読図の面白さを教えてくれた。今では、お陰で初心者読図を教えることが出来るまでになり感謝している。

今にして思えば、遠山さんは自分の興味ある事に関してはトコトン突っ込んで聞いたり調べたりする。私から見るとマニアックに知識を吸収している会員であると思っている。実際に興味ある知識を得るためには初めて会った人とでもすぐに打ち解けて会話が出来る特技を持っていた。あの懐かしい笑顔で真剣に深く入り込まれると、ほとんどの人は取り込まれて話し込んでしまう。今でも思い出すのは、いろいろな情報を奥深く、吸収して自分自身、楽しそうに我々に語ってくれる姿であり、いつも会うのが楽しみであった。これから山岳地理クラブの集いで会えないと思うと本当に淋しく残念である。これまで山岳地理、アマチュア無線、奥武蔵山城、等判らないことを教えていただき感謝している。

ご冥福をお祈りします。

追悼・遠山さん

『奥武蔵の事ども』

富永 滋

私が地理クラブに入会して間もない平成二十八年頃、遠山さんは毎回集会に参加しておられた。確か最初のきっかけは、たまたま話が刈場坂(カバサカ)峠のすぐ南にある正丸三等三角点(879.1M)とその南の831独標の山名に及んだときだった。一時期奥武蔵をホームグラウンドにしていた私は、道があろうとなかろうと殆どの尾根という尾根を歩き、一般のハイカーが知らない小さな山名も文献で調べて知っていた。特に山岳・山村文化に深い関心があった訳でなく、記録や報告を作成する上で山名を特定した方が都合良いからだった。「ものがたり奥武蔵」(神山弘、昭和57年)で調べていたから、それは「大ツツジ」と「小ツツジ」だと即答したところ、遠山さんは違うとおっしゃった。大ツツジと小ツツジまで知ってることは立派だが、その位置は著者の神山氏が間違っており、正しくは「横見山」と「ツツジ山」であり、ツツジ山を大ツツジ、南側の770M圏小峰を小ツツジと呼ぶこともあるという。そして、読んでおくと「陸測部報016号」※を渡された。さらに山名の間違いの話は、あの人の記録は誤りが多いと登山家・坂倉登喜子批判にまで広がり、誤りに気づくたび地図会社に訂正を要

求しているなど、徹底的な調査を行いその結果の反映を精力的に目指されていた。ひとかどの研究家はここまでやるのかと、強い印象を覚えたものである。

それから滝のような勢いで、奥武蔵や秩父を中心に、古い山名や古道に関する資料や情報を送ってくださり、西谷山の別称天目山の由来に関する大石眞人の中川称説(初版地形図作成時の秩父営林署中川担当区での名称)や、小ホームページ上に発表した昭和十年頃の数年間だけ存在した奥武蔵スキー場の第三ゲレンデの推定位置の問題点指摘など、書ききれないほど様々な、極めて専門的なアドバイスを頂き、意見交換をさせていただいた。大血川からの西谷山登山道の登山地図での抹消に関し、一帯の山域を管理する東大演習林から地図会社への申し入れについては把握していたが、遠山さんに遭難多発に伴う警察からの指導もあったとの話をお聞きした。フィールドワークの重要性を事ある毎に強調されていたが、残念なことにご一緒する機会がないままになってしまった。

心からご冥福をお祈りいたします。

※遠山元信『地元呼称を軽視した無謀な地図』、日本山岳会埼玉支部陸地測量部「陸測部報」016号、p.7-11、2016年9月。

遠山氏のAGCレポート(山岳地理クラブ会報)記事一覧

- ◇山岳展望 奥武蔵・丸山から見える北アルプス vol-3(2007/9/26)
- ◇大川峠への林道偵察 vol-7(分水嶺特集)(2007/1/16)
- ◇大川峠から上海岳の先まで vol-7(分水嶺特集)(2007/1/16)
- ◇鎌房林道サポート隊 vol-7(分水嶺特集)(2007/1/16)
- ◇分水嶺で火が点いたアマチュア無線 vol-7(分水嶺特集)(2007/1/16)
- ◇栗生沢附近の情報と聞き取り調査 vol-7(分水嶺特集)(2007/1/16)
- ◇行ってきました 奥武蔵・子の権現から前坂まで vol-11(2008/4/30)
- ◇GPSの大きな盲点 vol-12(2008/5/28)
- ◇日本の堰止湖の崩壊 vol-13(2008/6/25)
- ◇拉致された測量官 vol-17(2008/10/29)
- ◇行ってきました 雪の伊豆が岳へ vol-20(2009/1/28)
- ◇アマチュアの光通信 vol-21(2009/2/25)
- ◇訂正された山名問題 vol-24(2009/5/27)
- ◇高尾山GPS合同調査を終わって vol-25(2009/6/24)
- ◇水害時の知られざる山岳崩壊 vol-27(2008/8/26)
- ◇雲取山原三角測点保護への裏話 vol-32(2010/1/27)
- ◇勇敢な幕末女衆五人旅 vol-36(2010/5/26)
- ◇武甲山エクスペディション vol-38(2010/7/28)
- ◇三角点との縁 vol-46(2011/4/25)
- ◇関東平野から見える八ヶ岳 vol-48(2011/12/25)
- ◇千年に一度の地殻変動を掴んだ vol-49(2012/10/25)
- ◇偶然なのか——福島第一原発と柏崎刈羽原発—— vol-52(2014/8/25)
- ◇絵葉書で見る筑波山の一等三角点 vol-55(2015/12/5)
- ◇神城断層が動いた!! vol-56(2016/8/1)
- ◇平地の三県境 vol-57(2017/1/31)

- ◇珍しい三角点と標石を発見 vol-66(2019/6/30)
- ◇連載 ゆにーく標識&標石 ②子午線標 vol-15 ③新幹線から見える三角点標点 vol-16 ④姫路城内の三角点 vol-17 ⑤幅21センチの一等三角点 vol-18 ⑥営林署の標石 vol-19 ⑦幸せな四等三角点福岡県庁前 vol-20 ⑧丸宮標石 vol-21 ⑨一等水準点 vol-22 ⑩道路元標 vol-24 ⑪旧道路標識 vol-26 ⑫長野にある東京 vol-31 ⑬日本道路公団基準点 vol-34 ⑭郵政省用地標石 vol-35 ⑮雲取山一等三角点 vol-36 ⑯球分体がある苔むした標石 vol-37
- (参考)山(日本山岳会会報)への記事
- ◇DB研究会 山に関するホームページ 山637(1998/6/20)
- ◇DB研究会 インターネットの利用方法が多様化 山654(1999/11/20)
- ◇山遊会 同好会「山遊会」設立 山695(2003/4/20)
- ◇山岳地理クラブ 線の分水嶺で終わらず 山728(2006/1/20)

あとがき

遠山さんには、幾つかのテーマでAGCレポート向け原稿をお願いしていました。たぶん彼のパソコンには未発表の原稿がたくさん埋もれていると思います。先日、奥様にその旨お聞きしたところ、どこに何があるのか判らずパソコンも開けないとの事でした。いつか彼の遺稿を纏めたいと思っていますが、多方面で活躍していたようなので、それぞれの組織でも同じ様な計画があるかもしれません。何か情報をお持ちの方はご一報いただくと幸いです(kon)

AGCレポート vol-71 2020年11月10日発行  
 発行:公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ  
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付  
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441  
 編集担当:近藤 E-mail:yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp